

タイトル	迷走するピアジェ - 本当に構造主義者だったのか？
著者	小島, 康次; Kojima, Yasuji
引用	北海学園大学経営論集, 20(4): 99-116
発行日	2023-03-25

迷走するピアジェ — 本当に構造主義者だったのか？

小 島 康 次

はじめに

市川功著『ピアジェ思想入門 — 発生的知の開拓 —』(2002)はタイトルの通り、ピアジェの思想面での浩瀚な議論を網羅した他に類をみないピアジェ理論のアンソロジーになっている。構造主義あるいは構築主義についても、ピアジェ理論の視座からではあるが、ソシュール、レヴィ=ストロース、フーコーと代表的な構造主義者に対するピアジェによる批判の言説が詳しく紹介されている。ピアジェは構造主義者として自らを任じ、『構造主義』というタイトルの著書をクセジュ文庫の1冊として著しているにもかかわらず、ほとんど全ての構造主義者に対して polemical な態度に終始した。ピアジェの立場を一方的に擁護するのではなく、まず、構造主義というムーブメントの全体像を描いたうえで、そこにピアジェがどのように位置づくのかを考察しながら、主たる構造主義者に対するピアジェの批判の妥当性について論じることにする。小論は、果たして、ピアジェは真に構造主義者だったのだろうか、という筆者自身の疑問に対する解答の試みでもある。

I. 構造主義とは何か

1. 構造主義の歴史的展開

構造主義が1950年代から60年代にかけてフランスで得た華々しい成功は、フランスば

かりでなく、西欧世界における思想史においても類例のないものだった(北沢, 1968)。それは、構造主義が厳密な方法として登場し、科学への真に正当な道筋をつける可能性への希望を抱かせたためであり、また当時、飛躍的に発展しつつあった社会科学が既存の人文科学の古い権威に対して真っ向から戦いを挑んだ時期に、構造主義的プログラムが新しい勢力の代弁者としての役割を担ったためだった。だから、構造主義が西欧の思想史の中で抑圧されてきた諸科学、「人類学」、「精神分析」、「臨床精神医学」に対して、それらの背後にあるとされた無意識を称揚し、特別な地位を与えるところから出発したことは偶然ではなかった。また、社会科学一般の科学性を先導した「言語学」の役割を積極的に支持したことも、構造主義が現代思想の旗印となることに寄与した理由だった。

しかし、構造主義が社会科学全般にわたって導入されたきっかけは一つではない。構造主義は多くの異なる社会科学の領域で、互いに関係をもたない異なる思想家によって、同時多発的に開始された不可解な現象であったとさえ言える。現象学がフッサールによって、マルクス主義がマルクスによって、実存主義がサルトルによって第一声を上げられたのとは趣を異にする。確かに構造主義の現代的意味の成立は言語学の発展と軌を一にするというのは間違いのないであろう。しかし、ソシュールが『一般言語学講義』(1908-1909

[1991])において「構造」という言葉を用いたのはたった三度だけである。構造および構造主義という用語を一般に普及させたのはプラグ学派のヤコブソンとトルベツコイであり、それを明確な研究方法として位置づけたのはソシュールの後継者と目されるデンマークの言語学者イェルムスレウだった。1939年にイェルムスレウが創刊した言語学の専門誌の巻頭論文において初めて述べられた彼の構想の全体像が明らかになるのは、『言語理論の確立をめぐる』(1943)であり、その後、構造主義が人間諸科学全般に一大革命を起こすことになるには20世紀も半ばを過ぎるまで待たねばならなかった。

敢えてこの不可解とも思える状況を解するとすれば、構造主義がアンチテーゼとして敵対した近代主義の広がりとは似ていないでもない。17世紀の科学革命と呼ばれた自然科学における大転換がその後250年にわたってあらゆる科学の領域に波及していった過程とのアナロジーとしてみると、あながち不可解とも言えないかもしれない。その象徴的な学問領域が「心理学」であると見ることができる。心理学は一面で自然科学であると同時に人間科学でもあることも歴史的事実であろう。19世紀末、実験と観察、要素還元的なアプローチを標榜するヴントの実験心理学が1879年に発足する。しかし、平行して、19世紀はすでにニュートン・モデルが破綻しつつあった時代である。新しい物理学である場の理論によって、いわば構造を重視する自然科学のモデルが台頭してきた時代だったのである。そうした場の理論をいち早く取り入れて、近代主義的ムーブメントの最後尾につけていたヴントの実験心理学を批判して出現したのがゲシュタルト心理学であった。周回遅れの心理学が、期せずしてトップに躍り出たのである。

2. 近代科学としての「実験心理学」

心理学において「構造」が問題となったの

は、20世紀初頭のゲシュタルト学派を嚆矢とする(木田, 1991)。この背景には、17世紀のいわゆる科学革命以来、近代科学を主導してきた力学的世界観の崩壊がある。アイザック・ニュートンを代表とする力学的世界観は、理論的な不備をかかえながらもルネッサンス以前の神学的世界観を見事に覆し、近代科学を基礎とする新たな科学の時代を築き上げたことはよく知られている。そこで取られた大文字の方法論は、実験・観察の方法と要素還元論の2つである。これら2つの具体的方法を適用することによって、19世紀までの約250年間に自然科学は物理学から始まり、化学、生物学とより複雑な対象において、革新的で途轍もない発展を遂げた。そして、この自然科学的方法是、ついにもっとも複雑な存在である人間を対象とする科学、生理学にまで適用されるに至った。そこから心理学までの距離はさほど遠くない。フェヒナーの「精神物理学」、ヴントの「実験心理学」は、まさにそうしたニュートン・モデルの最終段階だったと言えるだろう。ニュートン・モデルには伏線がある。1つは、絶対的時間・空間の存在であり、もう1つは数量化可能性である。これらは哲学的に熟考されたテーゼではなかったが、暫定的なモデルとして採用され結果的に大きな成功を収めた。さらに心理学に関して言えば、ニュートン・モデルを支える哲学として発達したイギリス経験論における心の要素である単純観念(感覚)が、単純な状態から高次の複雑な状態へと変化する際に生じる観念連合というメカニズムが前提とされた。ヴントの実験心理学はそうした条件を満たした場合の心理学モデルであった。極端な言い方をすれば、ヴントの独創性はほとんどなかったと言ってもよい。内観法という実験・観察法を用いて、心の基本要素である「感覚」の性質を調べるといふモデルであり、それが連合してより高次の心理現象を説明できると考えるのである。

1875年、ライプツィヒ大学で哲学・生理学の教授に就任したヴントがゼミナール等で非公式に使用していた実験室が大学当局に認められ、1879年、世界で初の実験心理学講座が大学の正式カリキュラムとして開設された。この詳細については改めて紹介するまでもないであろう。前述したように、ニュートン力学をモデルとした「実験心理学」が世紀をまたいで多くの弟子を輩出し、特にアメリカからの留学生による内観法に対する批判が、やがてバロフの条件反射をモデルとする行動主義心理学の旗揚げに繋がったことは改めて論じるまでもない。そして、これらは依然としてニュートン・モデルの範囲内のできごとであった。

3. 場の理論の誕生 — 電磁気学とゲシュタルト学派

19世紀末、イギリスで一介の素人学者だったマイケル・ファラデーという男が並み居る著名な物理学の権威を尻目にとんでもない発見をした。電磁誘導の発見である。小学校も満足に行けなかった貧しい鍛冶屋の息子が生活のために丁稚奉公した製本屋で、むさぼるように読んだ自然科学の原稿によって科学に目覚め、やがて当時著名な科学者ハンフリー・デービーの助手として多くの科学的発見をし、イギリスを代表する科学者となった天才である。彼が子ども向けに行ったクリスマス・レクチャーをまとめた『ロウソクの科学』(1861 [1962])は今でも名著の誉れ高く、日本のノーベル賞受賞者の中にもその影響を受けた方がいるという話である。ファラデーが電磁誘導現象の理解のために、そこに電磁気の力の線が広がる、「磁場 (Magnetic field)」という概念を導入したことで、ニュートン力学が前提としてきた等質で、ニュートラルな時間・空間概念は再検討を余儀なくされる。ただし彼はそれを数学的に厳密に定義することはできなかった。その仕事は、ファラデー

のよき理解者だった天才数学者ジェームズ・クラーク・マクスウェル (1831~1879) に託される形となる。マクスウェルは裕福な家庭に生まれ、10歳で中学入学、14歳で論文を書いて神童といわれ、19歳でエジンバラ大学、ケンブリッジ大学を卒業して25歳でアバディーン大学の教授になったというスーパーエリートである。真逆の経歴を有する二人の天才が奇跡的な出会いを遂げたことによって、さしものニュートン・モデルも終焉を迎えることになる。

すでにファラデーの電磁誘導の発見が1931年になされていたとはいえ、それが物理学の大きな流れになるまでにはまだ多くの時間を要した。19世紀後半の物理学者の大半は、マクスウェルの方程式において光速が全ての観測者に対して不変になるという予測と、ニュートン力学の運動法則が別の慣性系に対して不変を保つことが矛盾することから、マクスウェルの方程式の方が近似的なものに過ぎないと考えた。しかし、1905年にアインシュタインが相対性理論を提出したことによって、マクスウェルの方程式が正しく、修正すべきはニュートン力学の方であることが明らかになり、ようやく新しい時代の幕が切って落とされたのである。

特殊相対性理論の出現によって、古典物理学における時間・空間の概念にも変更がもたらされ、空間それ自体が電磁場としての特性をもつものと解釈されるようになった。果たしてそれは物理学を手本としてきた心理学に影響を及ぼさないはずはなかった。1910年、ウエルトハイマーは要素に還元できない知覚現象(仮現運動)に関する実験を思い着いて、フランクフルト大学の実験室で一連の実験を行った。そこに集まったメンバーは、ウエルトハイマーの他、コフカ、ケーラーで、そこで行われた研究は1912年にゲシュタルト研究として発表され、ゲシュタルト学派が誕生した。後にベルリン大学に移った際にレヴィ

ンが合流し、初期のメンバー4人がそろうことになる。物質現象が空間における場の影響を受けながら生じるように、心理現象もそれに相当する心理学的な場においてその影響を受けるはずだと考えられた。

よく知られた例としてミュラー＝リヤーの錯視を考えてみよう（図1）。直線部が同じ長さの2本の線分の一方に内向きの矢羽根、もう一方には外向きの矢羽根を両端に描くことで、直線部分の長さが違って見えるという誰しも一度は目にしたことのある図である。外向きの矢羽根を付けた線分の方が内向きの線分を付けた直線よりも長く見える理由は、2次元の図（2本の直線）に矢羽根を付けることで、3次元の場が生じ、矢羽根の向きの違いによって直線部同士の間で遠近の差が生じるためである（図2）。外向きの矢羽根を付けた直線が内向きの矢羽根を付けた方の直線より遠くにある奥行の感覚が生じることにより、網膜上同じ長さの直線が遠くにある方が長くと推論され、実際に長いという知覚が生じる。このように感覚を要素として見た場合には説明できない知覚のことを「ゲシュタルト（形態）」と呼んだ。というより、われわれの知覚世界は決して客観的な物理世界ではないということであり、「錯覚（錯視）」というのは言葉上の表現に過ぎず、ゲシュタルトこそ知覚世界そのものだと言うべきなのである。

4. ソシュールへの回帰 — 構造主義の曙

“構造”という概念は、もとは建築技術に関する言葉であり、建物がどのように建てられているかを指す用語だったのが、17世紀から18世紀にかけて建築物に見立てた人体や言語など、さまざまなものに対して、各部分が組み合わさって全体を作り上げる意味に転用されたのが始まりである。構造論的方法が人間科学の諸領域に本格的に適用されるようになったのは19世紀以降のことであり、先に

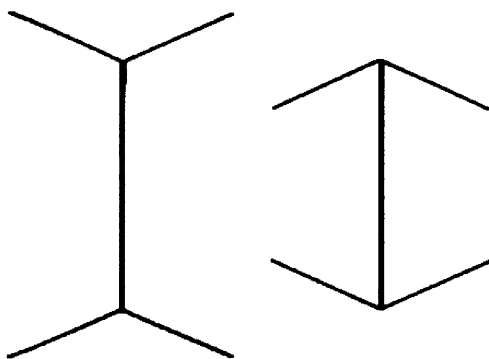


図1

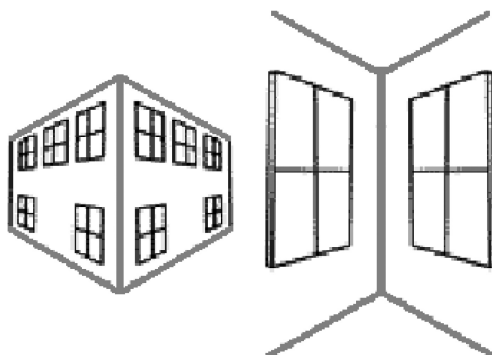


図2

述べたように、心理学の領域で20世紀初頭にドイツで登場したのが最初であるが、現代的意味への発展にはソシュールの果たした役割が大きかった。しかし、ソシュール自身の著作（ソシュール歿後、ソシュールが残した講義メモと聴講学生のノートを元にして、ジュネーブ大学の教授シャルル・バイイとアルベール・セシュエーの手で刊行された）『一般言語学講義』（1910 [2005]）が世に出た当初、それほど注目されることはなかった。多くの偉大な思想家（マルクス、フロイト、ニーチェ）の学説同様、時代の一步先を行く理論の先見性に時代が追いつくには時間を要したのである。

言語学は第一次大戦後、比較言語学を奉じるドイツの言語学一辺倒の観があったが、

1928年、ハーグで開かれた第一回国際言語学者会議において、ヤコブソン、トルベツコイらロシアの研究者と、ジュネーブのバイイ、セシュエーらが、ソシュールの名前を前面に押し出しつつ、初めて「構造主義」という言葉を発したのである。それは、言語同士を比較し分類するような経験主義的な言語学とは一線を画す革新的なものだった。すなわち、厳密な体系としての言語（ソシュールは講義の中で、「構造」の代わりに「体系」という用語を用いた）を言語学の目標に掲げるものだったのである。つまり、記号の恣意性の概念を確立し、内容や経験によってではなく純粋な差異によって成立する「価値」の体系（構造）を明らかにすることにより、言語学を独立した、新しい学問分野とするという野心的な主張を含意するものだった。

「記号体系（構造）の生にどんな力がはたらくか、初めからそんなことはわからない。記号体系（構造）は船台にのった船ではなく、海に浮かんだ船である。船体の形や何かでその航路をまえもって当ててみせることなど誰にもできない。」（『ソシュール講義注解』「11月23日付、[記号価値] 第二回講義より」）（1908-1909 [1991]）。

その後、『一般言語学講義』をめぐる大きな波が押し寄せる。この度の舞台はフランスで、火付け役はアルジルダス＝ジュリアン・グレマスだった。問題の論文は「ソシュール理論の今日性」（『現代フランス語』1956年第3号掲載）で、これこそまさにソシュールへの回帰をうながす内容だった。「哲学ではメルロ＝ポンティ、人類学ではレヴィ＝ストロース、文学ではバルト、精神分析ではラカンというように、いたるところでソシュールの名前がとりざたされているのに、肝心の言語学の分野で一向にそれらしい動きがないのはなぜか。そろそろフェルディナン・ド・ソシュールを正当に評価しなおすべき時が来ているのではないか。」（ドゥス、1991 [1999] より引用）

社会的活動における記号のあり方を研究する科学（総合的記号学のプログラム）を目指したソシュールの目論見は、こうして大きく踏み出したのである。

「言語は集団的、社会的な何かだと考えればことたりる。…（中略）…記号体系が作られるのは集団に向かってであって、個人に向かってではない。…（中略）…私たちは社会的所産の特徴をもって現れている現象だけを記号学的と認める。個人にしか属さないものを記号学的とみなすことは拒絶する。この社会的所産なるものが定義されるときには、記号学的所産もまた定義されているほかない。言語もしかりなのだ。言語は記号学的所産で、記号学的所産は社会的所産なのである。」（前掲の『ソシュール講義録注解』（前田、1991）より）。「記号と観念の関係を支配するのは個人的な理性だなどと保証してくれるものはいまや何もない」というソシュールの言葉をピアジェはどのように受け止めたのだろうか。発達の最上位に位置する形式的操作の段階における抽象的思考をも個人的な論理操作の構成によって説明しようとするピアジェにとって、ソシュールの記号学に対するこうした主張は受け入れ難いものだったのではないだろうか。

5. ソシュールからレヴィ＝ストロースへ： スーパーヒーロー現わる

ソシュールは、言語を共同体のメンバーが共有する記号体系としての「ラング」と個人的な言語行為としての「パロール」とにわけて、言語学の対象をラングに限定した上で、その共時的な内的構造を研究する立場を提唱した。そして、言語記号を〈シニフィアン〉（意味するもの）と〈シニフィエ〉（意味されるもの）とにわけて、シニフィアンが意味をもつのは他の記号との差異によるものだということを見出した。このような共同体の成員により無意識に使用される合理的構造がある

という事実の発見が、他の多くの人間科学に影響を及ぼしたのが構造主義という運動である。この構造の概念を文化人類学の領域に取り入れて、構造人類学を打ち立てたのがレヴィ＝ストロースである。彼は、心の無意識の構造がその内容に形式を与えるものであり、その形式が古代人と近代人、あるいは未開人と文明人の間で同一だったとすれば、文化における制度や慣習に当てはまる原則を知るには、それらの底に潜む無意識的な構造を把握することが必要にして十分な作業であると主張した。

レヴィ＝ストロースが構造に目覚めたのは、必ずしもソシュールの直接的影響によるものではない。彼にとってより重要な出会いは、アメリカにおけるヤコブソンとの間の相互聴講を通じた濃密な交友関係だった。第2次大戦下におけるアメリカへの亡命者同士、ロックフェラー財団によるヨーロッパ知識人救済のためのプロジェクト（ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチ）において、レヴィ＝ストロースはヤコブソンの音韻論に関する講義を、ヤコブソンはレヴィ＝ストロースの親族関係に関する講義を聴講し、互いの講義内容に緊密な関連があることに気づいたのがきっかけとなって、レヴィ＝ストロースの博士論文執筆がうながされ、それを基にした主要著書『親族の基本構造』（1949 [2000]）が刊行されることになる。構造人類学の実質的なスタート地点はパリではなくニューヨークだったのである。

もちろん、人類学における構造主義がレヴィ＝ストロース一人の発想から湧き出たものでないことは言うまでもない。当時、科学概念を精緻化することに向かっていた社会科学全体の機運と軌を一にするものだったことは間違いないであろう。『親族の基本構造』は、もっぱら親族関係という人類学固有の特殊なテーマに限定したものに過ぎなかったのに対して、「マルセル・モースの業績解題」

（1950 [1968]）は、デュルケム派人類学の巨匠マルセル・モースの著作集の紹介文という体裁をとりながら、その実、レヴィ＝ストロース自身の構造主義的プログラムを明示し、その厳密な方法論を展開してみせるという大方の予想を遥かに超える内容の一文となった（ドゥッス、1991 [1999] より引用）。この一文について、アルジルダス＝ジュリアン・グレマスは、「もし、何か一つ、（構造主義に関する）決定的な文章を上げるとすれば、この解説文こそがそれにあたる。結局、構造主義というのは言語学と人類学の出会いのことなのだから。」と述べ絶賛した。

レヴィ＝ストロースがマルセル・モースの業績解題という場を利用して自らの学説を開陳したのは、まず、当時フランス人類学の第一人者だったモースの権威を後ろ盾にすること、そして、こちらが本命なのだが、モースこそ人類学が他の人間科学に対していかなる問題提起をなしうるかをいち早く見抜き、やがて到来するはずの学問領域間の接近を準備した人物だったからである。さらに遡れば先達として、オーギュスト・コントとエミール・デュルケムの名前を挙げるのはそれほど的外れではなかろう。ゲシュタルト心理学の項ですでに述べたように、20世紀初頭の社会科学、人間科学は19世紀末の物理学の影響の下、ホーリズム（全体論）の波が押し寄せる時代だった。向かう方向は違っても、コントやデュルケム、そしてモースとレヴィ＝ストロースはホーリズムという共通の土台の上にそれぞれの理論構築を行ったのであるから。

とは言え、レヴィ＝ストロースが人類学史に刻んだ足跡は、他の並みいる学者が束になっても追いつけない巨大な一歩だったことも確かであろう。彼はフィールドでの観察事実の意味を説明する際のモデルを言語学の方法に求めたのである。すなわち自然科学におけるのと同様、構成された事実のほかに事実など存在しないという公準を出発点にすえ、

自然主義的モデルやエネルギー論的モデルのような古いモデルを一掃する方向性を明確に打ち出した。その結果、当時のフランス民族学で当たり前だった技術史や博物館による実証的データから人類学を引き離して、概念化や理論化による学問の方向へと大きく舵を切ったのである。ソシュールの記号概念を継承しつつ、シニフィアンをシニフィエに優先させるといふ、後にジャック・ラカンによって尖鋭化される特徴がすでにこの時期のレヴィ＝ストロースのテキスト「マルセル・モースの業績解題」(1950)に現れている。「社会的なものは言語と同様に一つの自律的な現実である。象徴はそれが象徴するものよりも現実的であり、シニフィアンはシニフィエに先行しつつそれを規定するのだ。」コードはメッセージに先行し、それから独立しており、主体はシニフィアンの法則に従うという構造主義の基本的テーゼがここに高らかに宣言されたのである(ドゥス, 1991 [1999]より引用)。

6. 「構造主義者」影のリーダー：ミシェル・フーコー

構造主義が時代を風靡する知的流行にまで広まるきっかけを作ったのはミシェル・フーコーの『言葉と物』(1966 [1974])であると言っても決して大げさではないだろう。この長大で難解な作品が初刷3,500部を数日で売り切ったことは伝説的なできごとだった。それだけではない。4月に出てから12月までに数回の増刷を経て2万部を売り上げ、翌年には10万部を超える売り上げを達成したのである。構造主義の狼煙が誰の目にも明らかになった年、それが1966年だった。フーコーいわく、「構造主義は新たな方法ではない。現代の知の、めざめた、不安な意識である。」(『言葉と物』)

この著書を手短かに言い尽せるものではないが、内容の理解を別にしてもその文体の華麗

さ、鋭い言い回しが知識人の大向こうを唸らせたのは事実であろう。それが単なる文章表現だけでなく驚愕すべき学識に裏打ちされていることに当時の人々は魅了された。フーコーは精神医学者でも考古学者でもなかったが、『言葉と物』は医学の歴史に適用した考古学的方法(『古典主義時代における)狂気の歴史』と『臨床医学の誕生』(1963 [1969])ですでに例証した方法)を人間科学全体に適用した作品である。彼によれば、それぞれの時代には、その時代の「知」を可能にする思考の型があり、時間を超越して個人を支配しながら維持され変化していく諸関係の総体(システム)が存在するという。フーコーは、そうしたシステムに“エピステーメー(認識系)”という彼独自の名前を与えた。

「言葉」と「物」とは、ルネッサンス以後、近代のエピステーメーとして設定された主題としての「人間」を解体すべく導入された観念だったのである。構造主義的思惟の基礎的な方法は、目に見える意図的な諸現象の背後にあって、通常われわれの意識から逃れているような無意識的「構造」を取り出して、その「構造」によって意識的諸行為がどのように規定されているかを探求することにある。個々人の意識を超えた「構造」に中心化される限りにおいて、個別的、意識的存在としての「人間」という概念は背景に退くことになる。それは、丁度、ゲシュタルト理論のいう図と地の関係におけるのと同様の反転関係が存在するのである。ゲシュタルト学派がデモンストレーションに用いるさまざまな図形の中でもとりわけ有名な「ルビンの壺」を思い出してみよう(図3)。黒く塗りつぶされた部分をヒトの顔が向き合うシルエットと見ると、黒い部分が全面に浮き出て、その間の白い空間が背景として退いて見え、逆に、白い部分を壺(ないし盃)と見ると、周囲の黒い部分は背景として退いて見えるという、いわゆる多義図形である。黒いシルエット部分を

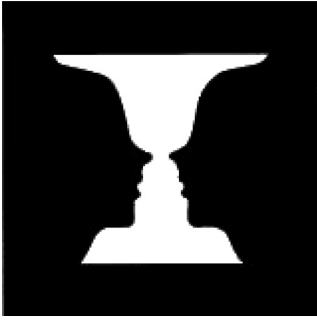


図3

「人間」、白い壺の部分を「構造」と仮に見ると分かり易い。図を顔のシルエット（「人間」として見れば、必然的に白い部分は背景として退き、壺（ないし盃）は消え去る。逆に、図を壺（ないし盃）（「構造」と見れば、黒い部分は背景として退き、顔のシルエットは消え去る。「人間」と「構造」を同時に見ることはできない。力点が個々人の意識を超えた「構造」におかれるかぎり、個別的、意識的存在者としての「人間」という概念は背景として退くことになり、問題性として消滅してしまうことになる。

フーコーは自著を語る上で、時代の断絶に言及し、自身をレヴィ＝ストロースの側に置くと同時に、20世紀前半を華々しく彩ったスーパーヒーロー、ジャン＝ポール・サルトルの「実存主義」を完膚なきまでに叩きのめしたのである。サルトルは、戦後フランス思想界の花形であり、多くの知識人を執筆者として糾合した雑誌『現代（レ・タン・モデルヌ）』を創刊した人物でもある。かのモーリス・メルロ＝ポンティとは二人三脚と言っても良いほど密着した間柄だったが、メルロ＝ポンティは1955年に出した『弁証法の冒険』（1955 [1972]）を境に、サルトルを厳しく批判し、両者は袂を分かつことになる。サルトルは彼が固執し続けた哲学者としてのアイデンティティが急速に輝きを失い始めたことに気づけなかった（あるいは、気づこうとしな

かった）。サルトルは『文学とは何か』（1948）で、作者と読者、その動機という問題について、文学が独自の何かとして実在することを露ほども疑わない姿勢に終始した。このような立場こそ、50年代の末に疑問視され、異議を申し立てられたことだったのに、サルトルは時代の趨勢を見誤ったのである。大戦直後には、サルトルの熱烈な支持者として自ら任じていたロラン・バルトでさえ、少しずつ彼の哲学から離れて、構造主義の冒険へと歩む方向を変えていった。

フーコーは「文学」について次のように喝破する。「文学」は人間の内面を問題にするような言語活動ではなく、表象や代理の体系であることをやめ、自己の外へと拡散する運動を通じて語る主体が空白であることを顕わにする活動である、と。こうした言明がラカンの記号論と驚くほど酷似していることは言うまでもあるまい。フーコーが問題にしているのは文学や哲学思想だけではない。神話研究、精神分析学、言語学などにおいても同様の、言語と人間の非両立性を宣告する。フーコーいわく、「サルトルは相変わらず19世紀の人なのです。彼の仕事は、徹頭徹尾、人間を人間自身の意味に適合させることを目指しているのですから。」（ドゥッス、1991 [1999]より引用）フーコーは、人間という形象に自己を同一化しようとする一切の目論見を俎上に載せ断罪する。「なぜなら、人間とはごく近年の発明であり、近い将来、消滅を余儀なくされるべく宿命づけられたかりそめの形象だからです。」と明言する。神は死に、今や人間もその後を追って姿を消そうとしている。「逆説的なことに、人間諸科学の発展は、われわれを人間の実体化へ、ではなく、その消滅へと誘っているのです。」時代を魅了したのはまさにこの「人間の死」だったのである。

『言葉と物』は次のような言葉で結ばれている。「人間とは一つの発明品であり、しかもそれが最近の発明品であることは、われわ

れの思考の考古学が容易に示してくれる。そして、おそらくその最後も間近なことであろう。…18世紀の転換期に古典的思考の土壌がそうなったように、こうした事態が覆ってしまうならば — そのときこそ賭けてもいい、人間は波打ち際の砂の面のように跡形もなく消え去ってしまうことだろう。」フーコーによれば、「人間」というのはたかだか18世紀末の産物にすぎず、それ以前には「人間」は実在しなかったという。つまり、それ以前にエピステーメーの次元で、人間は「人間」として主題的に問題とされることはなかったのである。近代性の発端は、カントとともに「人間」と呼ばれる経験的＝超越論的な存在が誕生した時に遡る。だから、フーコーの言う「人間の最後(=死)」というのは実際に存在する人間の死などではなく、近代主義社会における個人としての「人間」、すなわち、「主体としての人間」の消滅であることは言を俟たない。

後年、構造主義者と呼ばれることを頑なに拒んだフーコーではあったが、『言葉と物』はフーコーの思考がもっとも構造主義的であった段階、すなわち、記号体系の科学の段階を代表する著作であった。ルネッサンス以降、互いに異質なエピステーメーの継起の背後にフーコーが求めたのは、西欧文化の各段階において思考されざるもの様態であり、その歴史を超越した先験性だったのである。レヴィ＝ストロースが未開社会における社会慣行の思考されざるものに着目したことに範を求めて、フーコーは西欧の知を構成する土台の思考されざるものを解読することに注力した。それは、近代哲学においてカントが提起した哲学のアクチュアリティの問題、すなわち人間のあらゆる認識を批判する能力を現代哲学において提起し直したのだと言えるかもしれない。このことを通じてフーコーは、意味の哲学、ヒューマニズム、現象学に対して挑戦する構造主義者たちの影のリーダーと

して崇められるようになったのである。

II. ピアジェは構造主義者だったのか？

1. 構造主義の歴史からみたピアジェ

フランソワ・ドゥスの『構造主義の歴史』(1991 [1999])の人名索引を参照すると、断トツで多いのがレヴィ＝ストロース(115件)でソシュールがそれに続き、さらにフーコー、バルトの多さが目につく。様々な個別理論の土台となる大理論を生み出したマルクスとフロイトの引用度が高いのは別として、意外なのはラカンの引用数がソシュールに匹敵することである。ラカンについては構造主義者の範疇にとどまらず、ポスト構造主義者という面をもつことを考えれば当然のことかもしれないが、本稿では触れないでおくことにする。それでは、ピアジェはどのくらい言及されているのだろうか。わずか9件である。しかも他の人々と一緒にワンポイントで名前が挙げられている箇所がほとんどで、きちんとピアジェの思考を紹介しているのは3か所に過ぎない。それに対してメルロ＝ポンティは、構造主義者ではないにもかかわらず、構造主義の成立に大きな役割を演じた功績が評価され、その引用数が14件を数え、しかも、紹介されている内容の重要度からみてもピアジェを遥かに上回ることが容易に見て取れるのである。

ピアジェを構造主義者として言及する際によく用いられるのは、上記の3か所には含まれないが、理性の支配を強調するために抑圧されてきた形象の復権の一例として引き合いに出される子ども像についてであろう。レヴィ＝ストロースが野生の思考を復権させ、フーコーが狂気を監禁の対象とする以前の状態に復権させたのと軌を一にして、「幼児期はジャン・ピアジェによって、もはや成人期のたんなる裏返しとしてではなく、それ自体として考察に値する一時期としてとらえ直さ

れる」という行である。このポピュラーな表現だけをみるならば、ピアジェを構造主義者の列に加えることに疑問の余地はないように思われる。しかし、事態はそれほど簡単ではない。

ピアジェに対する第一の言及は、「第一部：50年代—草創期」の「第12章：認識論の台頭」の「認識論の全般化」という項目における次のような記述である。「この時代切つての認識論学者のひとり、ジャン・ピアジェの場合もまたその例にもれない。『われわれの共通の目標である科学の統一は〔……〕哲学と縁を切ることによってはじめて可能となる。〔……〕ギリシャ時代の数学から19世紀末葉の実験心理学にいたるまで、あらゆる科学は哲学からの離反をなしとげてきた。』（ピアジェ、1947〔1970〕）こうしてあるものたちは、哲学の支配を離れることが、人間科学を精密科学におとらぬハード・サイエンスに生まれ変わらせるためには不可欠であると考えたのである。」（ドゥス、1991〔1999〕）ここでピアジェは認識論学者と位置付けられていることに注意すべきであろう。構造主義運動が目指す人間諸科学を自然科学（ハード・サイエンス）と統一すること、そのために科学を語る言葉を論理学・数学のような普遍性の高い道具を用いること、すなわち、哲学と縁を切るという方向性において、ピアジェは構造主義者達と価値観を共有していたことはまちがいない。

ピアジェが発生的認識論において、心理学的問題空間を語る上で論理—数学的構造を前面に押し出したのもそうした大きな潮流の一つと考えられる。ピアジェが独自の認識論的立場（発生的認識論）から、子どもの認知構造についての理論を構築し、その際、当時のフランスにおいて顕著だった科学の数学化の流れを積極的に取り入れようとした点は、確かに構造主義と軌を一にするとと言える。それは、レヴィ＝ストロースがアンドレ・

ヴェーユ（シモヌ・ヴェーユの兄で、ブルバキ・グループの構造論的数学者）に助力を求め、ラカンがポロメオの輪をはじめとするさまざまな数学的グラフを駆使したことも平仄が合う。こうしたトレンドについてドゥスは、「これら形式的なモデル化の作業がめざしたのは、数学的・論理的な形式化と人間諸科学とのあいだの境界線の全廃であった。この種の願望がとくに鮮明なのが、ジャン・ピアジェである。彼は、数学という根からはじまって連綿と連なる系譜のうちに心理学を位置づけようとする。そのために作成されたのが、科学的な知の円状図式（ピアジェはこれを「諸科学の円環」と呼ぶ）である。これは、数学・物理学・生物学・心理学の四者を関連づけるような真の円環によって、多様な科学を結びつけ、それら全体の統一的・相互依存的な概念へと到達するものであった。」という論述は正しい。

しかし、そのことをもってピアジェ理論を構造主義の一翼を担うものと断じられるかどうかは疑問の余地が残る。ドゥスは、「ただし、ピアジェの立場は、使用される観念自体の歴史性に関心をよせる点で、一般的な（構造主義の）パラダイムとは一線を画する。彼の構造主義が発生的構造主義と称されるゆえんである。このような発生論（＝発達論）的発想は、ピアジェの場合、その子供の知覚発達に関する理論にもうかがうことができる。それによれば、子供は年をおっていくつもの平衡段階を経験するが、その過程で各段階ごとに過渡的なシステムが形成され、そのつど新たな知覚の図式や構造を同化することが可能になるのだという。」（ドゥス、1991〔1999〕）と述べ、ピアジェ理論が構造主義の主流ではないことを示唆している。

第二の言及もこのことと関連がある。1959年に催された構造概念に関する歴史的な二つの討議の一つにピアジェが座長の一人として招聘されたのである。人間科学の世界でじょ

じょに構造という概念が取りざたされるようになり、学問領域間の境界が消滅しつつあった時代のことである。構造主義という用語そのものはまだ一般的ではなかったものの、現象学に代表される志向性や意識の研究に代わるものとして構想された構造概念を検討し、総括しようとする試みが、この年初めて大規模に計画された。一つはオーソドックスな構造概念をめぐるシンポジウムだったが、もう一つのシンポジウム(スリジー・シンポ)は発生と構造を比較対照するシンポジウムで、モーリス・ド・ガンディヤック、リュシアン・ゴールドマンと並んでピアジェが座長を勤めたことは特筆に値する。フランスのノルマンディー地方の、元々は古城であったスリジー＝ラ＝サル国際文化センターは、国際学会の中でも第一線の研究者が数多く参加する場として世界的に知られている。議論のレベルが高いのはもちろんのことであるが、風光明媚な風景の広がるスリジーの施設や料理、図書室といったホスピタリティの質が高いことでも知られる。16世紀の城館で開かれたこのシンポジウムは構造概念そのものの検討というよりは、構造概念と発生概念の関係に焦点があてられるという、一風変わったものだった。と言うのはレヴィ＝ストロースを始めとする構造主義の本流を歩む学者は大方、構造概念と発生概念を両立不可能と考えていたからである。

それに対してゴールドマンらは、歴史と構造的一貫性の接点を見出すべく努力を傾けた構造主義者の中における少数派に過ぎなかった。なかんずくピアジェは、自身の研究をもとにしながら、構造をはなから受けつけないラマルク主義に対して、また、動態を無視するゲシュタルト心理学に対して、発生と構造の二概念が不可分であるという立場を強く主張した。ピアジェいわく、「生得的な構造などありません。すべての構造は形成過程を前提とするのです。」(ドゥス, 1991 [1999] より引

用) こうしたピアジェの発生に対するゆるぎない信念の言葉に出会うと、ピアジェが真正の構造主義者ではなかったという疑惑が再びわきあがってくる。ガンディヤックとゴールドマンと肩を並べて発生と構造の関係に関するシンポを主催したことの意味を問い直してみる必要がある。

まず、この企画の立役者の一人であるリュシアン・ゴールドマンの問題意識は奈辺にあったのか。ゴールドマンは、ピアジェの著書のドイツ語訳、ジェルジュ・ルカーチの文献のフランス語訳を研究の出発点としている。その意味で、ピアジェとの研究上のつながりは元々深かったと言える。ゴールドマンの研究関心はその後ひろがりをみせて、当時、フランスで流行していたマルクス主義思想に深くコミットしていったことは、左翼思想家ルカーチとのより強いつながりを感じさせる。つまり、ゴールドマンは構造主義とマルクス主義との合流点に位置していたと考えられる。それがゴールドマンの歴史と構造の折り合いをつけ、弁証法を方法として重視する「発生的構造主義」という見方の背景であることはまちがいない。しかし、フランス国内では有名人であったゴールドマンも国際的な知名度はそれほど高くなかった。一方、この分野の思想家としてルイ・アルチュセールを知らない者はいないであろう。『構造主義の歴史』における引用度数もかのイェルムスレウに匹敵するほどであるが、アルチュセールについても、ここではこれ以上論じないことにする。

さらに、アルチュセールに準じる人物として名前を挙げるとすればゴールドマンではなく、マルクスと構造主義の関係を親子の関係になぞらえたモーリス・ゴドリエになるだろう。マルクスが目に見える社会的関係と隠れた論理とを分離してみせた点、いわゆる歴史主義ではなく構造論的研究を優位においた点がゴドリエのマルクスに対する主たる評価点である。そして、経済における矛盾を生産力と生

産関係というふたつの相互に還元不可能な構造の間にあるものとした点で、マルクスを構造主義的パラダイムの先駆者としたことは慧眼であると言うべきだろう。ピアジェは、次項で述べるように、アルチュセールとゴドリエについて彼の著書『構造主義』（1968 [1970]）の中で好意的に紹介している。しかし、ピアジェの主たる論点は彼らの構造主義思想とは一線を画するものであることは結論の項で論じることとする。

2. 「構造なき」構造主義 vs. 「発生的」構造主義 — ピアジェによるフーコー批判

ドゥッスの『構造主義の歴史』におけるピアジェに関する第3の言及は、いわば構造主義に関するピアジェの本丸と言ってもいい著書『構造主義』（1968 [1970]）をクセジュ叢書の一冊として執筆依頼された件である。ピアジェ72歳の頃のことである。すでにピアジェは認識論に関する学者としての声望を得ていたし、発達心理学の理論家としても一定の評価を確立していた。しかし、そうした評価に比して、構造主義者としての位置づけは必ずしも高くなかった。ピアジェにとって構造主義は、認識能力を発生的に探究する上における科学的発想の方法に過ぎなかったのではないだろうか。

ピアジェは、ソシュール、レヴィ＝ストロース、フーコーに対してそれぞれの構造主義に即した批判を行っているが、とりわけ厳しい批判の矛先を向けたのはフーコーに対してだった。『言葉と物』に対するピアジェの評価は次のような好意的な言葉から始まる。「きらめくばかりの文体をもち、意想外で光彩豊かな考えにみちあふれ、印象的な博識（とくに生物学史にかんして、また、心理学史にかんしては比類がない）にもとづいた作品のかなり驚くべき実例である。」しかし、その後には次のような低評価の言葉が続く。「しかし、現在の構造主義から否定的側面しか引き

出してはおらず、かれの《人文学の考古学》において、とりわけ言語に結びついたいくつかの概念的原型の探究以外のものを見出すことはむずかしい。フーコーはとくに人間に対して批判的であり、人文科学を時の流れに秩序なく継起する《変動》、《歴史的ア・プリオリ》、あるいは「エピステーメー」の単なる一時的な生産物とみなすのである。」

ピアジェがフーコーを褒めていないことは明らかだろう。下世話な表現を使えば、饅頭の皮を褒めて餡をくさす、ということになるか。前半のプラス評価はいわば枝葉末節に過ぎず、後半の内容こそ構造主義の根幹をなす議論であることは一目瞭然である。さてこのピアジェによるフーコーに対する非難とも言える批評は、先の構造主義のもつ近代思想に対するアンチテーゼという立ち位置からして、やや奇妙なものと感じられる。ピアジェによる批判の論点の数々、「（人文学の考古学が）言語に結びついた概念的原型の探究でしかなく」、「人間に対して批判的であり」、「人文科学を《変動》、《歴史的ア・プリオリ》、（エピステーメーの）単なる一時的な生産物としかみなさない」等々は、ことごとく構造主義が目指した問題空間におけるフーコーによる解答そのものではなかったか。こうしたフーコーに対する正面切つての論難をみると、果たしてピアジェは本当に構造主義者の一人に数えられるべき人物だったのかという素朴な疑問がわいてくる。

ここで言う「構造主義者」とはフーコーを影のリーダーと仰ぐ、いわば構造主義の主流派のことである。それに対するピアジェの批判を一言で表す有名なキー・ワード「構造なき構造主義」について検討してみよう。このフレーズは特にピアジェの理論と直接関連なく、さまざまところで用いられるフーコー批評の常套句になっている感がある。木田元は『現代の哲学』（1969）において、「かれ（フーコー）は、人間科学が考古学の対象にな

ることによって、人間の観念の死を、ヒューマニズムの終焉を謳っているのである。この〈構造なき構造主義〉(ピアジェ)といわれるフーコーの思想を、はたしてどう評価すべきかは問題であろうが、それが構造主義にひそむ反人間主義のモチーフを徹底したかたちで展開したものであることは確かである。」と述べ、足立和浩(1978)などは、むしろ、フーコーを評価する視点から、単なる構造主義者のカテゴリーには収まり切れないという意味に用いてさえいる。しかし、随所にみられるこうしたピアジェによるフーコー批判のキー・ワードが必ずしも正しく引用されているとは言い難い。もっとも正しく引用されていると思われる市川(2002)の論述には、フーコーのエピステーメーとトマス・クーンのパラダイム論との間の類似点と相違点が次のように論じられる。

「ピアジェはフーコーの方を一見高く評価している。というのは、クーンの研究は、一時代の科学の根本原理の記述と変動をもたらす危機の歴史的分析に制限されているのに対して、フーコーの試みはこれらの根本原理を結びつけ、認識論的構造に到達する可能性をもつからである。だが、フーコーの企てが実現するには、エピステーメーを正確に評価する方法が必要であったにもかかわらず、「フーコーは自らの直観に頼ってしまい、すべての体系的な方法論を思弁的な即興に置き換えてしまった」とピアジェは述べる。」(市川, 2002)そして、このような問題からフーコーのエピステーメーには決定的な欠陥があるという。すなわち理性が理由なく変換すること、それこそが「構造なき構造主義」としてフーコーを論難する所以であるとされる。なぜなら構造とはすべからず発生的でなければならない、というのがピアジェの信念だからである。スリジーシンポにおけるピアジェの次の発言を思い出してみよう。「生得的な構造などありません。すべての構造は形成過程(発

生的であること)を前提とするのです。」(ドゥス, 1991 [1999] より引用)

3. 総括的構造主義と方法的構造主義 — ピアジェのレヴィ＝ストロース批判

ピアジェの言う構造主義とフーコーに代表される一般的な“構造主義”との違いはどこにあるのだろうか。ピアジェの『構造主義』(1968 [1970])にその重要なヒントがある。VI章「社会研究における構造の利用」の18節「総括的構造主義か方法論的構造主義か」がピアジェの側からみた構造主義に対する評価が縷々述べられている。これまで述べてきた構造主義の思想史上の位置づけと、そこにピアジェがどのように位置づくのかを念頭においてこの節を読むと、ピアジェの構造主義の輪郭がおぼろげながら浮かび上がってくる。

ピアジェは、レヴィ＝ストロースの著述を参照し、レヴィ＝ストロースがデュルケムを集団や社会を対象とする際の構造主義の先駆者と位置づけ、さらにマルセル・モースをそうした構造主義の実質的な創始者とみなしている点を確認したうえで、彼らの構造主義を「総括的構造主義」とであると断ずるのである。それに対してピアジェは自らが奉じる構造主義を「方法的構造主義」として次のように論じる。総括的構造主義が構造を構成する要素間の関係や相互作用を、自足し完結するものとしてしかみないのに対して、方法的構造主義はその体系を説明するために、その下部に必ず潜在的な構造を考え、それによって観察しうる構造を演繹的に導き出すことが可能である点に両者の決定的な違いがあるとする。さらに後者は論理数学的なモデルで再編成することが問題となるのだともいう。すなわち、構造というものは「事実」の領域には属さず、したがって集団や社会の成員には「意識されない」ものだという点が強調される。言い換えれば、社会的構造は、物理学における因果

性と同様、演繹的に再構成されるべきものであり、また、心理学における場合と同様、意識ではなく行動の次元に属するものだという。

さて、これらのことを構造主義のいわば真打、レヴィ＝ストロースに対するピアジェの批判に即して詳細にみていこう。

ピアジェは、レヴィ＝ストロースの構造概念を紋切型で批判しているのではけっしてない。レヴィ＝ストロースの用いた「構造」が元々はソシュール学派の構造観に着想を得たものであり、自身の研究対象であった親族組織において束や変換群のような代数的構造を適用して形式化することができたのだと一定評価する。さらに、そうした構造は親族だけに限らず、文明のあらゆる慣行や認識的産物のうちにみられることを明らかにしたとさえ認める。レヴィ＝ストロースの主要著書『構造的人類学』（1958 [1972]）、『悲しき熱帯』（1955 [2000]）、『野生の思考』（1962 [1976]）を参照したうえで、レヴィ＝ストロースの「構造」概念を次のようにまとめる。「構造が精神の無意識的活動の内容に形式を与えるものであり、それがあらゆる精神にとって根本的に同一であるとすれば、十分に分析を進めた上で、そうした無意識的構造に到達すれば、それが構造であることの必要かつ十分な条件なのである」（『構造的人類学』）ここでピアジェが問題にするのは、「不変の人間精神」あるいは「精神の無意識的活動」とは何か、ということであり、それはチョムスキーにおける「生得性」でもなく、「体験されたもの」でもまったくくないという。なぜなら、民族学はまず、第一に心理学であるから、体験のような固有の意味での下位構造を主たる研究対象とすることはないからだというレヴィ＝ストロースの主張が引用される。（『野生の思考』）ここでいう「下位構造」とはマルクスによって提起された経済学理論における上部構造に対する下部構造のことであると解される。レヴィ＝ストロース自身、「…わた

しは、マルクスによって素描されたばかりの、この上部構造の理論に貢献したいと願うのである」（レヴィ＝ストロース、1962 [1976]）と述べている。マルクス主義をめぐる議論においては、しばしば慣行（上部構造）が実践（下部構造）から直接に生じるかのごとき主張がみられるが、実践と慣行の間には、つねに概念的シエマという媒介物が介在するというのがレヴィ＝ストロースの見方であり、また、ピアジェの考え方でもある。すなわち、ピアジェにとって構造とは、マルクスのいう下部構造と上部構造の間に挿入されるシエマの一体系である、ということになる。

これで問題は解決したのだろうか、否、そうではない。構造というものの存在が容認されたとしても、今度は、それがどのように生じ、またそれが個人の内に如何なるものとして「存在」するかを理解するという問題に問いが深められなければならない、とピアジェはいう。現象学を批判的にとらえるレヴィ＝ストロースは、「主体」や「体験されたもの」の絶対的優位を信じていないことは明らかであり、したがって、それは超越的な「本質」ではないはずだとピアジェはレヴィ＝ストロースの構造概念を追い詰める。そして、レヴィ＝ストロースが頻繁に用いる、「構造は〈知性〉あるいは〈恒久不変な人間精神〉から生じるものであり、それが社会的なものに対して優位を占め、心的なものに対して優位を占め、有機体に対しても優位を占める」という表現に対しても批判を加える。社会的なもの、(個人内の) 心的なもの、(生命的な) 有機体にも属さない「構造」とは一体どのような存在なのか、と。

ピアジェが考える答えは次のようなものである。現実世界においては、あらゆるものが数学の場合同様、形式はそれを包含する形式に対して内容であり、また、内容はそれが包含する内容に対して形式なのだとしてピアジェは指摘する。これは、いわばわれわれの物の見

方、すなわち階層構造として世界を見るというある科学的態度(サイモン『システムの科学』1977 [1969])を反映している。そうなること、あらゆるものが構造として見られることになり、それでは何をもって構造とするかという問題自体が消え去ってしまう。あえて構造として定義するには、それが体系として固有の法則をもち、その法則が変換にかかわるものでなければならないということになる。とりわけ構造の自律性と自己制御が確保されることが重要であるとされる。そして、そうした一般的な形成過程が均衡化、すなわち、ピアジェが自らの知能の発達を説明する理論としてきたメカニズムなのである。当然のことながら、ピアジェにとってはこのプロセスこそがあらゆる構造とその変換にかかわる事象を完全に説明しうるものとされる。こうしたピアジェ独自の理論化の是非についてはこれ以上論じないことにする。それは、ピアジェ理論全体に対する根源的な批判となるからである。ここでは、あくまでピアジェの構造主義に対する立ち位置について論じるのみに止める。

4. サルトル批判にみる「構造主義者」との違い — 結論にかえて

フーコーがサルトルを厳しく批判したことは先に述べた通りである。しかし、ここでフーコーを「構造主義者」の代表とするのは憚られる。ピアジェが批判したエピステーメーの方法論的連続性の問題は大方の指摘するところで何もピアジェ独自のものではなかった。フーコーがそのことに気づかなかったわけでは決してない。師範学校時代にアルチュセールの指導を受け、36歳の時にジル・ドゥルーズと知り合い、43歳の時に『言葉と物』の副題だった「人文科学の考古学」を主題とする著書『知の考古学』を著わしてそうした批判に対する答えを出したフーコーを構造主義の枠内に押し込めるのは無謀というも

のだろう。

もう一人の、まさに構造主義の代表者にふさわしい人物、クロード・レヴィ＝ストロースに登場してもらおう所以である。それでは、レヴィ＝ストロースはサルトルに対してどのような態度をとっていたのか。元々、レヴィ＝ストロースとサルトルは二人三脚と呼べるほどの間柄だった。三行半を突き付けたのはレヴィ＝ストロースの方だった。1962年、『野生の思考』の末尾にサルトルの『弁証法的理性批判』(1960)に対する反駁が載ったことで二人の間の論争の火ぶたは切って落とされる。とは言っても批判はレヴィ＝ストロースからサルトルに向けられた一方的なものだった。それに先立つ1955年に出版された『悲しき熱帯』に対して、サルトルは一読するやすっかり魅了され、彼の忠実な支持者だったジャン・プイヨンに『レ・タン・モデルヌ』にその書評を書くよう依頼したくらいである。皮肉なことにそのことによって、それまでレヴィ＝ストロースの仕事についてほとんど知らなかったプイヨンまで構造主義の側に追いやられる結果になる。サルトルは『悲しき熱帯』の射程を見誤った、というのがフランソワ・ドゥスの評である。サルトルがこの作品を高く評価したのは、観察者の存在がはっきりと認められる点、観察対象の原住民と観察者との間に心の交流が成立していた点が大きく作用していた。つまり、サルトルが評価したのは対象の説明そのものではなく、そこに生じていた観察する側とされる側との間の「了解」だったのである。

レヴィ＝ストロースが攻撃目標としたのはサルトルだけではなく、学問の女王の座にあった哲学の地位であり、歴史哲学、歴史主義に与えられた特権的地位だった。レヴィ＝ストロースいわく、「サルトルの体系においては、歴史がまさしく神話の役割を果たしている」(レヴィ＝ストロース、1962 [1976])のであり、さらに、「歴史とは超越論的ヒュー

マニズムが最後に逃げ込む場所にすぎない」（前掲書）のである。これら二大スターの間の直接対決は表立って交わされることのないまま歴史主義に対する構造主義の勝利が明らかとなり、1962年を境にサルトルと実存主義は思想の表舞台からじょじょに退場することを余儀なくされる。

ピアジェは、レヴィ＝ストロースが『野生の思考』の最終章の大半を割いて批判したサルトルの『弁証法的理性批判』に対する議論を彼の『構造主義』第七章20節で取り上げ、いわば、二人の大家をまとめて一つの俎上に載せるといふ大胆な論理の展開を行う。論点は2つある。一つは科学主義と実証主義の違い、もう一つは弁証法におけるヘーゲル主義とマルクス主義の違いであり、すでに『哲学の知恵と幻想』（1965 [1971]）において詳細に論じた内容をコンパクトに要約したものである。そのせいか、要領よくまとめられているとは言え、叙述が簡略化され過ぎていて、理路をたどりにくいという感は否めない。

第一の論点は、ピアジェが諸所で繰り返している事柄であるが、科学の土台となる構造主義はつねに構成主義と連帯関係にあり、それは「歴史的発展」、「相反する対立する要素」、「対立の〈乗り越え〉」という3つの特徴を備えた弁証法的な性格をもつという主張にまつわるものである。サルトルにおける弁証法的思考の主要な成分は「構成主義」とその帰結である「歴史主義」だとされ、レヴィ＝ストロースの批判は主に「歴史主義」に対するものであると同時にサルトルが現象学から引き継いだ〈私〉（＝主体）の閉鎖性に対する批判でもあるという。しかし、このサルトル思想の難点は、弁証法から生じたものではなく、哲学的なものにとどまっていた弁証法には消し去ることのできなかった実存主義の残滓なのだといふピアジェは指摘する。そして、構成主義に対する批判についてみると、それが科学的認識におけるものではなく、サルトルにお

いては哲学的思考の専有物であるという誤解に基づくものだといふと断じられる。このような科学的認識に対するサルトルの過小評価は、科学をほとんど「実証主義」とその「分析的」方法からの借用で済ませていることに由来するとピアジェは言う。実証主義と科学とは同じでないばかりか、しばしば両者は反対のことを行う場合さえあるというピアジェの主張は正しいけれども、果たしてレヴィ＝ストロースのサルトル批判が構成主義と弁証法における誤解によるものだとする解釈には疑問が残る。

第二の論点は、マルクスの仕事を構造主義的に分析するアルチュセールの仕事についてであり、第一の論点における弁証法の問題を深く掘り下げることもである。ピアジェは、アルチュセールとともに、先に紹介したゴドリエが執筆し、『レ・タン・モデルヌ』に掲載された「資本論における体系、構造、矛盾」（1966 [1968]）という論文に注目する。アルチュセールはマルクスの弁証法をヘーゲルの弁証法から切り離して構造主義的形式を与えることにより、マルクス主義の認識論を作り上げることを目論んだとされる。若きマルクスがヘーゲルよりもむしろカントやフィヒテの問題意識をその出発点としたというアルチュセールの説に対しては、さすがにピアジェは判断を保留するものの、マルクス主義における思考を一つの「生産」であり、「理論的実践」であるとする見方には全面的に賛意を表し、それらが個人的主体によるよりもむしろ、社会的・歴史的因子も介入する相互作用の結果であるという見解を表明する。そして、ピアジェは、この節をゴドリエの引用で締めくくる。「人間の〈科学〉の可能性の基礎になるのは、社会的構造の機能と進化と内的照応の法則を発見する可能性であろう。…中略…このように理解された構造主義においては、構造と機能、発生と歴史、個人的主体と社会は、たがいに切り離すことのできないものに

なるのである。」(ピアジェ, 1968 [1970])

こうした見方をあと数歩進めればそれがヴィゴツキーの発達論(ヴィゴツキー, 1934 [1962])と重なるものであるように感じるのは筆者だけであろうか。

【参考文献】

- 足立和浩 1978 人間と意味の解体 — 現象学・構造主義・デリダ 勁草書房
- 市川功 2002 ピアジェ思想入門 — 発生的知の開拓 — 晃洋書房
- 木田元 1991 現代の哲学 講談社・学術文庫
- 北沢方邦 1968 構造主義 講談社・講談社現代新書
- Althusser, L. *Lire Le Capital, tome 1*. Petite Collection Maspero, 1965 [アルチュセール, ルイ他 (今村仁志 訳) 1996-1997 資本論を読む(上・中・下) ちくま学芸文庫]
- Dosse, F. *Histoire du Structuralisme: 1. Le champ du signe, 1945-1966*. 1991 [ドゥス, フランソワ (清水正・佐山一 訳) 1999 構造主義の歴史(上) 記号の沃野 1945~1966 国文社]
- Dosse, F. *Histoire du Structuralisme: 2. Le chant du cygne, 1967 a nos jours*. 1991 [ドゥス, フランソワ (仲澤紀雄 訳) 1999 構造主義の歴史(下) 白鳥の歌 1967~1992 国文社]
- Faraday, M. *The Chemical History of a Candle*. 1861 [ファラデー, マイケル (三石巖 訳) 1962 ロウソクの科学 角川文庫]
- Foucault, M. *L'Histoire de la folie à l'âge classique*. 1961 [フーコー, ミシェル (田村俣 訳) 1975 狂気の歴史 新潮社]
- Foucault, M. *Naissance de la clinique*. 1963 [フーコー, ミシェル (神谷美恵子 訳) 1969 臨床医学の誕生 みすず書房]
- Foucault, M. *Les Mots et les Choses*. Gallimard 1966 [フーコー, ミシェル (渡辺一民・佐々木明 訳) 1974 言葉と物 — 人文科学の考古学 新潮社]
- Foucault, M. *Maladie Mentale et Psychologie*. Presses Universitaires de France 1966 [フーコー, ミシェル (神谷美恵子 訳) 1970 精神疾患と心理学 みすず書房]
- Foucault, M. *L'archéologie du savoir*. 1969 [フーコー, ミシェル (中村雄二郎 訳) 1970 知の考古学 河出書房新社]
- Gremas, A.-J. *Seantique Structurale*. Larouse, 1966 [グ

- レマス, アルジルダス=ジュリアン (田島宏・鳥居正文 訳) 1988 構造意味論 紀伊國屋書店]
- Godelier, M. *System, structure et contradiction dans Le Capital*. 1966 *Le temp modernes*, [ゴドリエ, モーリス 資本論における体系, 構造, 矛盾 「現代(レ・タン・モデルネ)第55号」に原著掲載: [邦訳] Pouillon, J.(ed.) ブイヨン, ジャン編 (伊東俊太郎他 訳) 1968 構造主義とは何か みすず書房 所収]
- Hjelmslev, L. *Prolegomenes a une theorie du langage*. 1943 [イエルクスレウ, ルイ (竹内孝次 訳) 1968 言語理論の確立をめぐって 岩波書店]
- Levi-Strauss, Cl. *Les Structures elementaries de la parente*. PUF 1949 [レヴィ=ストロース, クロード (福井和美 訳) 2000 親族の基本構造 青弓社]
- Levi-Strauss, Cl. *Introduction à l'oeuvre de Marcel Mauss*. 1950 dans *M. Mauss, Sociologie et anthropologie*. PUF. [レヴィ=ストロース, クロード マルセル・モースの業績解題 (清水昭俊・菅野盾樹 訳) マルセル・モースの世界 1968 みすず書房所収]
- Levi-Strauss, Cl. *Tristes Tropiques*. 1955 [レヴィ=ストロース, クロード (川田順造 訳) 1977 悲しき熱帯 中央公論者]
- Levi-Strauss, Cl. *Anthropologie structurale*. Plon 1958 [レヴィ=ストロース, クロード (荒川幾男・生松敬三・川田順造・佐々木明・田島節夫 訳) 1972 構造人類学 みすず書房]
- Levi-Strauss, Cl. *La Pensee sauvage*. Plon 1962 [レヴィ=ストロース, クロード (大橋保夫 訳) 1976 野生の思考 みすず書房]
- Merleau-Ponty, M. *Les aventures de la dialectique*. 1955 [メルロ=ポンティ, モーリス (滝浦静雄・木田元・田島節夫・市川浩 訳) 1972 弁証法の冒険 みすず書房]
- Piaget, J. *Elements d'epistemologie genetique*. PUF. 1947 [ピアジェ, ジャン (滝沢武久 訳) 1970 心理学と認識論 誠信書房]
- Piaget, J. *Sagesse et Illusions de la Phisosophie*. Presses Universtitaires de France 1965 [ピアジェ, ジャン (岸田秀・滝沢武久 訳) 1971 哲学の知恵と幻想 みすず書房]
- Piaget, J. *Le Structuralisme*. PUF Que Sais-Je 1968 [ピアジェ, ジャン (滝沢武久・佐々木明 訳) 1970 構造主義 白水社・文庫クセジュ]
- Sartre, J.-P. *Critique de la raison dialectique*. 1960 [サルトル, ジャン=ポール (竹内芳郎・矢内原伊作 訳) 1962 弁証法的理性批判 1. 白水社]

- de Saussure, F. *Cours de Linguistique Generale: Maurice Constantin*. 1910 [ソシュール、フェルディナン・ド（影浦挾・田中久美子 訳）2007 一般言語学講義 コンスタンタンのノート 東京大学出版会]
- de Saussure, F. *Cours de Linguistique Generale*. 1908-1909 [ソシュール、フェルディナン・ド（前田英樹 訳・注）1991 ソシュール講義録注解 法政大学出版局]
- Simon, H. A. *The sciences of the artificial*. MIT Cambridge 1969 [サイモン、ハーバート（高宮晋 監修：稲葉元吉・吉原英樹 訳）1977 システムの科学 ダイヤモンド社]
- Выготский, Л.С. (Vygotsky, L.S) *Мышление и речь. (Language and thought)* 1934 [ヴィゴツキー、レフ（柴田義松 訳）思考と言語 1962 明治図書]
- Wertheimer, M. Experimentelle Studien über das Sehen von Bewegung. *Z. Psychol.*, 1912, 61, 161-265.